

多職種チーム「N-EAT」

摂食・嚥下機能の 維持・回復をサポート

西岡病院

西岡病院（豊平区）は、摂食・嚥下障害を早期発見し、食べる、飲み込む機能の維持や回復を支援する多職種チーム「N-EAT（エヌイート）」を結成。高齢の患者さんたちが安心して経口栄養を続けられるためのきめ細かなサポートを実践している。

チーム名の「N-EAT」は「西岡嚥下安心チーム」の頭文字を取ったもので、英語の「食べる（eat）」の意味が含まれている。メンバーは医師（内科・リハビリ科）、言語聴覚士、看護師、管理栄養士、医療ソーシャルワ

ーカー（MSW）で構成している。

評価入院で適した 摂取方法を探す

摂食・嚥下障害とは、食べたり、飲み込んだりすることが困難になる状態のこと。有症者の大部分は高齢者。食べ物が気管に入り、誤嚥性肺炎を起こすなど命に関わるリスクがある。

口腔、咽頭、食道に異常があったり、認知症が進行して食物を認識できなくなることもある。

同院は、一昨年からは摂食・



口腔、咽頭、食道の状態を調べる内視鏡検査

嚥下評価入院を開始。対象者は、同院など社会医療法人恵和会の病院、クリニックの患者さん、介護施設の入所者のほか、近隣の医療機関・施設や在宅療養している高齢者などを幅広く受け入れている。

評価入院は、嚥下障害が疑われる人に、1週間の予定で入院してもらい、エックス線による嚥下造影検査や内視鏡



バリウムを混入した食べ物を飲み込む様子を撮影したエックス線画像

ACPを取り入れた 摂食・嚥下評価

摂食・嚥下評価にアドバンス・ケア・プランニング（ACCP）を取り入れているのが同院の特色。ACPとは、患者さんが将来的に望む医療やケアを本人と家族、医療者が前もって話し合い、認識を共有するプロセスで、同院では以前から積極的に推進している。

チームリーダーの吉川匠内科医長は「早期発見・早期介入で進行を遅らせることが可能である一方で、老衰の過程で避けがたい現象であることを受け入れた上で、どのような方針が望ましいのかを考えることとなります。食べたいという意思がある患者さんには誤嚥のリスクを承知していただいた上で、その想いに行き渡り添い、食べることだけをあきらめずに支えていくことを目指しています」。

試食会を開催して アイデアを共有

同チームでは、法人グルー



N-EAT メンバーによるカンファレンス

プの医療機関、施設の栄養士がそれぞれソフト食やミキサー食などの食事を持ち寄って、とろみ具合や味付けなどを披露する試食会を定期的に開催している。お互いに意見交換を行い、工夫やアイデアを出し合って共有するのが目的。

また、MSWは評価入院した患者さんが元の施設や家庭に戻る際に、患者さん用メニューの摂取方法やリハビリなどを継続できるよう、介護者に引き継ぐなど退院後のケアを行っている。

吉川医長は「もう食べることでできないと思われていた患者さんが、評価入院によってまた口から食事ができるようになったときは、本当に良かったと思います」と語る。

ビューポイント



リーダーの吉川匠内科医長